

徳川家康の遺訓と「青春」とい う名の詩

koberyo1

最近のモラルの荒廃ぶりには眼に余るものがある。「法律さえ侵さなければ何をしても許される」といった考えや風潮が蔓延して日本人の道徳心は戦後、ひどくお粗末なものになってしまった。

人間としての道理や義務、それに責任といったもの、すなわち「自分の国は自分で守る」といった責任や自分のことだけではなく「公」、いわゆる「おおやけ」を常識に据えて行動する人が少なくなってきたように思われる。

たとえばの話、祖国を愛するといった自己犠牲をいとわぬ精神も、わたしからみれば、かけらもなく失われてしまっている。楽をして生きるのではない。

「人生はいつでも上り坂」なんだということを肝に銘じて生きねばならないのである。わたしの若い頃は必死になって国を守ったものである。「人生はいつでも上り坂」なんぞなんでもない！

徳川家康は次のように言っている。

「人の一生は重荷を背負うて遠き道を行くが如し。急ぐべからず。不自由を常と思えば不足なし。心に望み起らば困窮したる時思い出すべし。堪忍は無事長久の基。怒は敵と思へ。勝つことばかり知りて負けること知らざれば害その身に至る。己を責めて人を責むるな。及ばざるは過ぎたるより勝れり」

以上、徳川家康の遺訓である。

なお、わたしは本（紙の本）が好きで、本の収集をしてきた。その数は自分でいうのもなんだが、四畳半の書庫にずっしりと詰まっている。

その本のなかに「青春」というタイトルの詩を書いた詩人の本がある。幻の詩人、サムエル・ウルマンの本である。

その一節をここに紹介すると、

「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方を言う。（中略）……ときには、二十歳の青年よりも六十歳の人に青春がある。年を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いる」

とある。

サムエル・ウルマンの詩を紹介し、解説したこの本、「青春」という名の詩―幻の詩人サムエル・ウルマン」は宇野収、作山宗久の共著であり、産業能率大学出版社刊で昭和六十一年に出版された。心のささえになった本である。

参考図書、「青春」という名の詩―幻の詩人サムエル・ウルマン、産業能率大学出版社刊